『ダフォディルの花 ケネス・モリス幻想小説集』
（国書刊行会）刊行記念

アイリス

ケネス・モリス

THE IRIS
(Suggested by Tschaikowsky's
"Synphonie Pathétique"
Second Movement)
Kenneth Morris
館野浩美訳
2020年9月16日発行

アイリス（チャイコフスキーの悲愴交響曲第三楽章から連想して）

アイリスは花々のなかでいちばん敬虔だった。彼女が花を咲かせ、その花がこのうえなく深い紫であるのも天への憧れのためだった。

彼女は朝の栄光に向かって伸びあがり、頭上の美しい青を一途に慕った。「なにも語まないこと」豪奢な夢を纏って紅い芍薬は言った。「遠すぎる。どうしたってわたしたちには行けやしない」と薔薇も言った。「あそこにわたしたちの持っていない、どんないいものがあるって言うの」釣鐘型の花に天の色を宿す青いヒヤシンスは訊ねた。「お聴き」喇叭水仙はささやいた。いつも天上そのものである音楽を聴いており、彼女の美しさはいっしんに聴きいるがゆえだった。

それでもアイリスは切迫の紫に身を焦がした。「ここは辛いこと」溜息を吐いて言う。「あちらにはわたしの夢みる完成がある。天まで伸びてあのほんとうの美にたどりつこう。御座と栄光の御前に、この世からの祈りと讃美のように」

「おまえの願いを叶えよう」花々の大祭司が宣した。

アイリスはそんなことはまったく知らなかったが、ふいの喜びにうたれ、自分が上へと花をつける新たな力を持っており、どこまでも薄れてゆく有明月の銀に彼女の匂やかに深い紫を並べた。「ここはなんて安らかなのでしょう。なんというきよらかさ。輝かしい神の御国にこんなにも近づいたのですもの」彼女は下を見やり、庭の仲

間たちを憐んだ――薔薇に芍薬、自らの青さに浸るヒヤシンス、どんな秘密を抱えているのか想像もつかない喇叭水仙。

それからさらに上を眺めるや、すぐに紫色の嬰児の大陽の真昼に行く。彼女は無限に向かってひたすらに伸びていく。憧れの場所にきっと辿り着けること、約束は果たされる、海に注いだ。残っていた氷はあなたをせっかきとなり、木々が育って森になり、山々は花を咲かせた。

かつての庭園にふたたび花が咲き乱れた。喇叭水仙は優しい光輝を広げ、まだたっぷりと天にそのものである音楽に聴きいった。ヒヤシンスが花びらとと、釣鐘型の花の色だった。芍薬はやはりの豪奢に惜しみなく、気高い失意の薔薇は深紅。彼女らに混じってアイリスも花咲いた。「わたし天にどりのくのって言ったらどうしょう。ほら見、着いたじゃない、ここが天上よ」

が空の太陽にふたたび火を点けた。ひとつの火花がかつての坑道と翳げ目を通って下へ運ばれ、大地の心臓にもういちど夢みる力を点した。ついに火が消え果てた。残っていた氷はあなたをせっきとなり河となり流れてゆき、海に注いだ。ふたたび草は緑に萌え、木々が育って森になり、山々は花を咲かせた。

かつての庭園にふたたび花が咲き乱れた。喇叭水仙は優しい光輝を広げ、まだたっぷりと天にそのものである音楽に聴きいった。ヒヤシンスが花びらとと、釣鐘型の花の色だった。芍薬はやはりの豪奢に惜しみなく、気高い失意の薔薇は深紅。彼女らに混じってアイリスも花咲いた。「わたし天にどりのくのって言ったらどうしょう。ほら見、着いたじゃない、ここが天上よ」

そうして彼女は呟いた。「ようひょっと、そうすれば行きっと着くはず」

とうとう時そのものが崩壊し、終わりを迎えた。アイリスの霊は死に、紫の蝋の生命が絶え、身体は地に向かって落ちていった。

速力を増し、ついには燃え尽きるまで落ちていった。炎が消え、ほのかに輝く燃えしとなるまで落ちていった。ついに燃えきしの輝きも消え、空間に光を放つものはなくなった。そしてついに厚く千リーグも地球の屋を覆った氷に叩きつけられて飛び散った。

すると破片のひとつひとつから燃えきしの芯に残っていた炎が飛び出した。それはあらゆるきたるべきの火だったの。山から山へ、大陸から大陸へ、火は飛び移った。風に乗って舞い上がったひとつひとつの炎

は「ずよ」

遠大な時の周期が過ぎ、世界そのものの寿命が尽きた。遥か遠い彼方の根を寒さが襲った。死んだ世界の凍てつく冷たさがとってくる。稲妻のようにすちやかに裂き這い竦り、何百万年もの竦りつづけた。彼女はけっして下の寒さを思わなかった。つれんだとりつくいまた天上を思った。「あともうひとつ花を咲かせたら、きっと着くはず」

まもに咲かせようとしていた花を寒さが襲い、花は萎まれた。それでも気づかず、まだ天を求めながら、彼女は紫の蝋のような蕾にしがり、ジリジリとプロキオンを越え、美しきカペラを越え、オリオンの腰帯のミンタカを越えた。驚と北極の竜を越え――一兆の百万倍のオリオンを、そして北極星そのものを越え――アルデバラン、ヒアデスを越えた。

のち年が過ぎた。後に残してきた星々は彼女自身の花のように見えた。

間たちを憐んだ――薔薇に芍薬、自らの青さに浸るヒヤシンス、どんな秘密を抱えているのか想像もつかない喇叭水仙。

それからさらに上を眺めるや、すぐに紫色の嬰児の大陽の真昼に行く。彼女は無限に向かってひたすらに伸びていく。憧れの場所にきっと辿り着けること、約束は果たされる、海に注いだ。残っていた氷はあなたをせっきとなり河となり流れてゆき、海に注いだ。ふたたび草は緑に萌え、木々が育って森になり、山々は花を咲かせた。

かつての庭園にふたたび花が咲き乱れた。喇叭水仙は優しい光輝を広げ、まだたっぷりと天にそのものである音楽に聴きいった。ヒヤシンスが花びらとと、釣鐘型の花の色だった。芍薬はやはりの豪奢に惜しみなく、気高い失意の薔薇は深紅。彼女らに混じってアイリスも花咲いた。「わたし天にどりのくのって言ったらどうしょう。ほら見、着いたじゃない、ここが天上よ」